

第6期町田市民文学館運営協議会第3回議事録

- 開催日時 2023年6月20日(火) 18:00～20:00
- 開催場所 町田市民文学館 2階大会議室
- 出席委員 会長 渡邊正彦
副会長 長尾洋子
委員 阿部哲也
委員 貝原俊明
委員 草刈大介
委員 中垣里子
委員 名取玲子
委員 若宮和男

- 欠席委員 委員 熊谷玄

- 事務局出席職員
市民文学館担当課長 野澤茂樹
担当係長 笠原雄一
担当係長(学芸員) 神林由貴子
主任(学芸員) 山端穂
主任(学芸員) 谷口朋子

- 資料
資料1 文学館に関する主な事項について(3月7日～6月19日)
資料2 ニューノーマル時代において展示施設に重要なことはなにか?
資料3 文化施設の経営的視点で、いま、何が求められるのか?
資料4 ニューノーマル時代に求められる事業展開について
資料5 2022年度事業実績
参考資料1 「森田MIW展結果報告」と「アンケート集計」
参考資料2 「施設紹介」と「第3期町田市民文学館運営協議会の答申」
参考資料3 町田市文化施設・公共施設コスト一覧
追加資料 定性的な価値をいかに考えるのか

○ 次第

開会

議事

1 事務局からの報告

(1) 3月7日以降の文学館の出来事について

【事務局】資料1について説明

【議長】ここまでの内容について 質問・意見をお願いしたい。

【委員】今日マチ子氏の座談会は本人が全て来たのか。

【事務局】オープニング記念対談、座談会、アーティストトークの計3回の全て本人が来た。

【委員】座談会はどのような層が参加していたのか。

【事務局】オープニング記念対談は、対談相手が辻村深月氏であったため、二人のコアなファンが多かった。明らかに今までよりも若い人が多く、下は辻村深月氏のファンという中学生から上は50代までで、コアな層は30代、40代であった。

座談会は、今日マチ子氏の書籍をほぼ手掛け、有望視されている装丁デザイナーの川名潤氏と編集者の野口理恵氏の3人で実施。3人で今日マチ子氏のパブリックなイメージを作り上げているということで、編集者などの同業者が多かった。また、美大系の学生や美術デザインを目指しているような人が参加していた。年齢層は30代、40代が中心であったとみている。

アーティストトークは平日夜間に人数を30名に限定し実施。このイベントの応募が一番多かった。抽選の結果だが、この座談会は、40代の男性の参加が目立った。参加は40代、50代が多かった。今回のイベントの参加者の7割が女性であるが、アーティストトークは10名弱が男性であった。イベントは非常に和やかに行われた。

【委員】ことばらんの常連ばかりが参加ということではなかったということか。

【事務局】常連ではなく、今日マチ子氏のコアなファンの参加が多かった。

(2) 森田 MIW 展の結果報告について

【事務局】参考資料1について説明

【議長】何か質問・意見はあるか。

【委員】今回は20代がターゲットで来館が30%に留まったということだが、通常の来館の展示と比べてということか。

【事務局】展覧会ごとに大きく異なる。例えば前年度の「57577展」は10代、20代が多く、2019年度の「三島由紀夫展」は文学好きの60代が中心であった。展覧会、テーマによって変わる。2022年度の「将棋文学は」来館者は少なかったが、年齢層は万遍なく来館。

【委員】今回は、SNS や Twitter などでの精力的な発信したとのことだが、もともとの既存のファンの他にプラスアルファを取り込むには来館者の発信がどこで行われるかによるところがあると思う。Twitter ですら日本では利用の年齢層が高い。TikTok、LINE VOOM などショート動画が若い人向けであると思う。館として企画展に合わせて SNS をチョイスするのは大変だと思う。来た人が自然に発信して、ターゲットやそれぞれの居場所にあわせてどうするかを考えることがひとつであるのと、デジタル化をとりいれ、公式 LINE アカウントを設け、QR コードを読むことで、文学館をいちいち検索する必要なく、プッシュ通知が届くようにするのがよいのではないか。アナログだとつらいのでは。

【委員】30%が20代だったという報告は、絶対数が大きいので自分は決して悪くないと思う。20代でも成熟した鑑賞者を思わせる感想が書いてありいいことだと感じた。デジタル化については、若い人にとって自分が参加できるという実感を持てるような仕掛けがあると反応がいいのかもと思った。

2 討議

(1) ニューノーマル時代において展示施設に重要なことはなにか？

(2) 文化施設の経営的視点で、いま、何が求められるのか？

【事務局】資料2について説明、続いて資料3と参考資料2について説明

【議長】まずはICOMで討論されている博物館の役割の方向性について意見をお願いしたい。意見が出ないようであれば、委員の方にお聞きしたいと思う。例えば世田谷文学館でニューノーマル時代を意識した何か考えがあるのでしょうか。

【委員】特に意識した取り組みはない。ずれた質問かもしれないが、説明にあった2015年に行われた市民参加型事業評価では廃止に近い要改善ということであったが、どういう対応だったのか。

【事務局】平たくいうと、事業仕分けであり、市民の代表が参加して、市の事業について評価を行ったもの。「問題なし」、「改善」、「廃止」の3つのレベルで評価をされ、その当時「問題なし」とされた事業はほとんどなかった。ほとんどの事業が「改善」となったが、文学館については限りなく「廃止」に近い「改善」という評価だった。その後しばらくは、廃止か存続かが大きな論点になった。存続ということが決まったのは文学館のあり方見直し方針が出た段階で、そこで継続ということになった。4年間くらい、どうしようかと改善プランをやりながら考えた。

【議長】自分も参加していた。町田ゆかり作家ということに強いこだわりを持っていたが、その町田ゆかりを取っ払いながら多様な表現を取り入れ、町田という枠組みはもちろんあるが、周辺の相模大野とか地域を網羅しながらその中心点としての町田ということで、周辺の地域を扱うことが大きな変革になった。ニューノーマルは、そういう状況の中でどうい

方向に進んでいくのがよいのか、必ずしもつながらない部分もあるかもしれないが、ニューノーマルは時期的にもあることだし、そのなかで文学館がどのように進んでいくのかを考えてもよいのではないかと思う。その点でご意見をいただきたい。

【委員】質問だが、2015年から2019年までの間に存続するためにがらっと変えないといけないということだったと思うが、それまでの間、中心的なことは何か。文学館としてことばらんどとしてやっていた非難対象になるまでの間やったことは何か。

【事務局】基本は展覧会が一番大きい柱。次に普及事業イベント、ホールの貸し出し、会議室の貸し出し。展覧会については、町田に縁のある作家がいたので先ずはその展覧会を開催することをオープンしてから数年やってきており、普及事業についてもゆかりの作家をベースに行ってきた。図書の貸出事業についても展覧会に取り上げられる作家は非常に限られているので、その他多くの市民作家も含め、先ずその作品が市民の目に触れることを大事にして当時はやってきた。

【委員】年間でやっていた展示の数は変わらないのか。

【事務局】1年目は4回はやっていないが、2年目からは春夏秋冬の年4回実施。当初3年くらいはすべてゆかりの作家。その後も8割がゆかりの作家の展覧会をやってきていて、市民参加型事業評価の時も継続してほぼゆかりの作家で実施。

【委員】今、文学の扉とかことばの扉とかこれから掲げていこうというミッションというか、文学館として一番やりたいことは何か。文芸とか遠藤周作さんとか、小説とか、本を読んでもらうことなのか、本に触れてもらうことなのか、お客さんに来てもらうことが一番なのか。評価基準はもちろんあると思うが。

【議長】文学館サイドとしてどういう方向性を一番に考えているのか。

【事務局】答えは2つあって、1つは作家個人の業績を検証していくこと、もう1つは作品の良さに触れてもらうこと。

【委員】リピーターがなかなかできないという話があったが、そうだろうと思う。好きな作家の時には来館するが、本来ことばに触れてもらう、文学に触れてもらうとか大きくあると思うが、ことばらんどでやっていることとどうリンクしているのかわかりづらい。文学館というイメージが強くて、外から見ている人とのイメージは覆せなくて、やっていることとのギャップがある。なので、何が一番にやりたいかが言えるとわかりやすいのかなと思う。

【委員】1回1回の企画展はそのコンテンツなので、それはそれでよいが、館の全体としてのイレーションだったり、例えば文学館でも前橋では萩原朔太郎という作家が入ると、「ちょっといい」で通っている。何か変わったこともやるぞみたいになる。ここに来た時にさっきのLineで繋いでもよいが、次は町田の文学館は、こんなことを切り口とした企画展をこれか

らもやっていくので、たぶん、あなたに合うと思うから情報を取れるようにしておいてください、というちょっとしたフォーマットでもいいと思う。例えば、作品に触れた時、見に来た人に何かを語ってもらう機会を作るとか。それはどの企画展でも最後は語るということが毎回統一されていると、町田の文学館は展示を見るだけではなく、見たらそれについて語るというフォーマットが入っているとそういう場所になっていくみたいなことがあると思う。企画展ごととはそれぞれ違い、それはそれで素晴らしいと思う。クオリティとしては、本当に無料でいいのっていうコメントがあったと思うが、やはり個々になっているので、もっと繋がるコアが必要であると思う。あと、ニューノーマルはもう誰も使ってない言葉だけど、どこまで使って行くのかと思っている。それでもニューノーマルの意図、アフターコロナをニューノーマルとすると、その場所に行って現地現物だけではないという面とつながりを持ちながら行くということだと思う。企画展を見に来た人だけではなくて、その外で見に来た人が語っているとか、そうじゃない友達に話が出てるとか、そういうコミュニティのユーザーをニューノーマルと呼ぶとするならば、かつその中に若い世代を明確にとっていくのだとすると、やはり SNS にどう吐き出されるかはもっとドラスティックにやった方がよいと思う。かつ企画展の最初のうちに内覧会とかで誰に来てもらうかによって繋がれる世代が全然変わる。例えば TikTok とか YouTube とかで小説がいきなり売れたということが起こる時代。若い世代は、インターネット民化すると何か流行ればみんなそれをやりだして語りだすことが起こる。そういう層が繋がれる、この人たちに届けるこの繋がりになる人を入れることがよいと思う。究極は協議会のメンバーにするのがよいと思うが、現在の構成には、20代がないので 20 代を取り入れるのは無理だろうと思う。協議会に入らなくても、20 代を繋げられる人を巻き込んでいくと、展示を見て、語るかどうかはわからないが、全体の空気は変わるのではないかと思う。

【議長】繋がりが見えてきたときに定性的評価が確立されるということですね。

【委員】もともとことばは数字に比べたら定性的なもの。

【委員】感想も熱い定性的なものだったと感じた。発言のあった 2 名の意見はほとんど賛成であるが、それをどこに着地するかを考えると、ニューノーマルであったり、マーケティングであったり、古い言葉であるけど形をつけなければならないということをつけていたと思う。個別の展覧会はそれぞれ力のある作家達のものを実施しているので、コアなファンが来るだろうが、新規の非リピーターがこれだけ来ているのに継続性がないことをもっと問題視した方がよいと思う。問題が分かっているのに問題視して協議会の場にあげないといけないと思う。例えば先ほど SNS の個々のメディアのことをあげたけれども、そこで何を目指すかという、若い人の承認欲求を晴らすこと、はけ口を見つけることである。そうでないどのような展覧会を実施しても、継続的に続かず、刹那に終わってしま

う。文学館の会議室を利用した人が、ここの展示物を観ずに帰ってしまうことは忌々しき問題である。具体的に展示会場以外の場所、例えば階段の踊り場に、代表となる作品を掲示し、展示会場では写真はダメだけど、その場所では写真を撮っていいようにし、ハッシュタグをつけてどのメディアでもいいからあげてもらい、文学館でそれを評価するとか、その感想をまた評価しあうとかあっていいと思う。

設立の目的は、ゆかりの作家ということはあったかもしれないが、事業仕分けでこれからどうするか整理するという経緯を経てきても、今こうなっているということが大事である。博物館的要素をもっているところが新たに何をするか。何をやりたいかを投げられてやるものではなく、ニーズが何なのかということここで表現するものと、ここの財産である文学、文芸表現であるというもの両方を持っていて、そのつなぎとなるものは常設で何かある。表現できる場所があれば、繋がりがもてるのではないか。このような時代なので、もう少しハードルを下げてみんなが参加できるような、簡単に SNS で表現できるような、承認欲求を満たしながらもここに来てよかったと言わせるような仕組みを作る必要がある。若い人のニーズにあったフォーマットを作ることが大切。やっていることはすごく良いが、それは関連性がなく、刹那である感じが否めないのはどうしてなのかと思う。何か常設で定まったものがあるとよいと思う。

- 【議長】いろいろな話題が出た。受益者負担などについても何か意見はあるか。
- 【委員】受益者とは町田市民か。
- 【事務局】市民だけではなく、ここのサービスを受ける全ての人。
- 【委員】来館者に出してもらおうという意味もあるのか。
- 【事務局】そのとおり、サービスを受ける人に出してもらおうものである。ただ、ここは入館料を取っていないので。
- 【委員】自分は市民なので受益者負担というと自分の市民税からだなと思う。来た人がたとえ無料であっても、喜び満足して帰り、次も来ようと思えば広義の受益者負担だと思う。
- 【委員】自分は、税金を払っていれば無料でもいいとは思いますが、遠くから来て、お金を払ってでも来る人を無料にするのは、あまり必要がないと思っている。ただの箱貸しはしない方がよいと思う。例えば、「文ッ字フリマ」みたいに、観に来た人だけではなくて、ここを使いたい人がファンを連れて来たときに、売り上げをシェアしてもらおうとか、使っていることに間違えない。有料化するところもいろいろあるかなと思う。また、満足したかというだけでなく、定性ということは方向が色々あるということであり、この展覧会でどんな感情になったか、人はいきなり発言することは難しいので、どんな気持ちになったかというフォーマットを作り、悲しくなったとか、項目で感情を選べるようにし、見える化するようなきっかけのやり方はたくさんあり、仕掛けが必要ではないか。
- そうすることで、来た人が、自分は鑑賞してどんな気持ちになったのか客

観的にわかると思う。もっとアウトプットする仕掛けが必要だと思う。

【委員】それは、先ほど言っていた常設的なものということによいのか。自分は有料の方が絶対いいと思う。無料か有料かといったら、有料のものを観たいと思う。無料といったらちょっと、しょぼいと思ってしまう。お金は取った方がいいと思う。経営的視点とは別に期待の持たせ方としては有料の方がいいと思う。それは博物館としてはできないのか、どうだったか。

【委員】そこも確認したかったのだが、自分から学生に勧めると、どうしても学校の先生に勧められたという先入観から若い人たちも枠にはめられてしまって、義務教育の中で教育の一環として行くところというイメージがついてしまっていると思う。そこが1つハードルとしてある。公共文化施設というのは、実はそこがハードル。そこで、そういうことはなるべく打ち破って欲しいということがあって、なんらかの活動に参加させてもらうことにした経緯がある。そうするとかなり力量不足ということが目立ってしまって、文化施設というところに、あまり行き慣れてなく学生はすべてのことが初めてというところがあり、学びはあるが、1人の市民として内容物に触れることが出来ていないと感じる。教育機関の枠組みで提供することの難しさがあると思う。自分が日々接している文学系の学生の姿と一般の公共に来て刺激を受けて何か自分をやり通す若者像が今一つ自分の中で合致していないというもどかしさはある。これは大学の学生の質とか傾向とかあるいは学びとかで差はあるのだろうが、同じ表現学部の中でも違うし、隣の芸術学部では、芸術学部の方がさすがに行きつけているというところはあるが、文学館という括りだと芸術学部の学生にとっては自分の範疇外になっていると思う。ことばらんどの方性はいいと思う。

…休憩… (今日マチ子展見学)

(3) ことば・文学の魅力をいかにして伝えるか？

【事務局】資料4と資料5について説明

【議長】ここまでの内容について 質問・意見をお願いしたい。

【委員】文学館のあり方を小学校の教員が語ると何があるのかなと思っていたが、9年前に来た時に、文学館というと固いイメージであったが、ことばらんどと言うと言葉に関する楽しみがあるところなんだろうと感じた。しかし、なかなか子ども達もあまり行っていないという実態がある。まわりにいっぱいいるにも関わらず、行ったことがあるよという程度で、子ども達が接する面白さが欠けている。例えば、今日マチ子展の題名は隠しておいて、絵だけを見て題名はこうではないかと自分でつける面白さがあってもいいのかなと感じた。そういう取り組みがあったら面白そうだなと思う。そうするとより絵と言葉がマッチする。自分が発想したもので創造性が広がる。話にもあったが、ショートショート

の1つの発想からどんどん広げていくという取り組みが学校にも必要で子ども達にも必要。出張事業大歓迎。

【議長】 そのほかどうか。

【委員】 教育と展示というところになると先ほどほかの委員の人が言っていたことで気になることがある。教えるという感じになるのか。

【委員】 受益者負担と言うのも、今日の教科書みたいに提供されてしまうと感覚も大学1，2年生ぐらいはそうになってしまう。

【委員】 そこが変わっていくと面白いと思っている。文学は変わっていくものだという話があったが、中学生、小学生ぐらいの文学っていうと、例えば歌ができればそのノベライズ本を買ったり、あとアニメ、声優とことばらんどがことばをひろげるなら声優とのコラボが絶対に面白いと思う。中学生、小学生の心が動く仕掛けを考えることが今の文学。教育の話でもターゲットは若い層とって大人が考えたものを渡すと思っているけれど、小学生は難しいかもしれないが中高生ぐらいのサークルの人に一度、企画展を企画してやってみてもらってもいいのでは。大人が考えて子どもが受け取るだけっていうのは教育ではそもそもなくなっている。場所も利用率をあげるとかであったら、主体を若い人に渡してしまうとか一緒にやるでもいいのでは。

【委員】 公共施設の場合、勉強から離していくということはすごく大事な気がする。連れていかれるところだと思ってしまうので。自分で企画するというのもよいし、自然に辿って中に冒険しにいけるみたいなこともよいと思う。

【委員】 作品を持ち出してはいけないけれど、小中学生にこういうのがあるよっていうようなアピールがあれば、ほかにも見てみたいなのが出てくるのではないか。

【議長】 そろそろ時間のため、今回の意見をこれからの事業に活かして欲しいと思う。

3 その他

(1) 第4回運営協議会スケジュールの確認

【事務局】 次回は委員の予定が合う12月12日(火)18時からの開催とする。